

——キーワードの「未来知」ですが、具体的にはどのようなものですか。

学長 少し耳慣れない言葉かもしません。例えば一九七九年に登場したソニーのウォークマンの出現によって、音楽は従来の聴き方からいつでもどこでも楽しむものへと変わりました。これは、新たな知や製品によって、

「未来知」——新たな価値を創造する

未来ビジョン「志」を二〇二四年にバージョンアップした際には、二〇二四年一月に発生した能登半島地震からの復興に寄与するためのミッショントークションも入れました。

「文理医融合」の切り口で研究拠点群を育む

——金沢大学の特色ある研究についてうかがいます。

学長 研究大学として未来ビジョン「志」の中でも研究を最も高く位置づけています。

がん進展制御研究所は約六〇年の歴史を持ち、国立大学で唯一、がんに特化した研究所です。さらに共同利用・共同研究拠点になっています。また、二〇一七年に文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」に採択され、設立したナノ生命科学研究所（WPI-NanoLSI）では、世界最高レベルの原子間力顯微鏡技術を開発し、それを使つたさまざまな融合研究が進められています。

プレベルの研究拠点群を拡充すること。第二に、国際社会のリーダーとなる「金沢大学ブランド人材」——私は一言でいうと、「志を実現するタフな人材」と表現しています——を輩出すること。第三に、人・知・社会の好循環をつくり出す持続可能で自律的な大学運営・経営の実現です。

この「あるべき姿」からバックキャストし、今、何をすべきかを示したものがミッションです。全部で二七ありますが、最重点ミッションを三つ挙げると、一つ目が「大学院の飛躍的機能強化」。大学院は研究と教育の両面を担います。二つ目は「世界的視座による優位性・独自性のある研究分野の育成・先鋭化」です。研究大学として基礎研究を大切にし、さらに異分野間の融合研究を進めていきます。三つ目が、それを社会につなげる「全学を挙げての実証研究の展開」です。

未来ビジョン「志」を二〇二四年にバージョンアップした際には、二〇二四年一月に発生した能登半島地震からの復興に寄与するためのミッショントークションも入れました。

——キーワードの「未来知」ですが、具体的にはどのようなものですか。

学長 少し耳慣れない言葉かもしません。

例えば一九七九年に登場したソニーのウォークマンの出現によって、音楽は従来の聴き方からいつでもどこでも楽しむものへと変わりました。これは、新たな知や製品によって、

さらに、本学らしい挑戦として、医学と考古学を融合した研究を行なうサピエンス進化医学研究センターがあります。骨サンプルからDNAを取り出しゲノム解析を行い、人類の進化や現代の病気との関わりを探っています。また、観光分野では先端観光科学研究所で、障がいのある方の移動支援など全ての人がいづれでも安心して観光を楽しむことができる社会を実現するため、デバイス開発から都市政策までを含む「文理医融合」の切り口で研究を進めています。本学はこうした学際研究が育ちやすい環境があります。

研究を支える基盤整備として、若手研究者



図 学長揮毫による題字

学長インタビュー

国立大学法人
金沢大学

和田 隆志学長

オール金沢大学で新しい価値を創造し続ける

わだ・たかし 1988年金沢大学医学部医学科卒業、1992年同大学院医学研究科博士課程修了 博士（医学）。2001年金沢大学助手、2007年同教授、2016年同学長補佐（研究戦略担当）、2018年同医薬保健学域医学類長、同副学長（研究力強化・国際連携担当）、2020年同理事（研究・社会共創担当）・副学長などを経て2022年4月より現職。

国立大学法人金沢大学は、1862年（文久2年）に創設された加賀藩彦三種痘所を源流とし、旧制第四高等学校、金沢医科大学、石川師範学校、金沢工業専門学校などの前身校の歴史と伝統を受け継いでいます。金沢大学憲章「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念に立脚し、2022年に金沢大学未来ビジョン「志」を策定しました。このビジョンを不動の「北辰」（北極星）に見据え、現代の課題解決を先導し、未来の課題を探究し克服する知恵「未来知」により新たな価値を創造するとともに社会に貢献できる人材の育成を進めています。

今回のインタビューでは金沢大学未来ビジョン「志」を中心に、金沢大学の特色ある取り組みと大学運営・経営の方向性について聞きました。

——二〇二四年九月末に新バージョンが公表された金沢大学未来ビジョン「志」についてうかがいます。

学長 未来ビジョン「志」は、二〇二二年四月の学長就任後、翌五月に策定したもので、大学憲章に掲げる基本理念「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」の実現に向け、「オール金沢大学で『未来知』により社会に貢献する」という揺るぎない未来ビジョンを掲げました。「オール金沢大学」には、学生・教職員・卒業生に加え、本学に関わってくださるステークホルダーの皆さまと一丸になって、という思いを込めています。キーワードは「未来知」です。本学では「現在の課題を解決するとともに、未来の課題を探究し克服する知恵」と定義しています。言い換えれば、未来の新たな価値を創造する知り、本学はそうした価値を創造し続ける大学であります。それが私たちの「志」です。タイトルの「志」、Aspiration、は私自身が筆で書きました（図）。

日指すべき未来ビジョンを不動の北辰（北極星）のように明確に示し、オール金沢大学のベクトルを合わせていくのも私の仕事です。「北辰」は、前身校の一つである旧制第四高等学校の校章になつており、本学の中央図書館の吹き抜けにもデザインされています。このビジョンの下で掲げる「あるべき姿」は三つです。第一に、研究大学として世界トップ

「非連続なイノベーション」を創出し続ける

—J—PEAKSの取り組みについてうかがいます。

学長 本学は二〇二三年十二月に文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J—PEAKS）」に採択され、文理医融合による「非連続なイノベーション」を創出し続ける世界的拠点の形成を目指しています。

「非連続なイノベーション」とは、これまでの延長線上にない新たな価値の創造と定義しています。基礎研究・融合研究の高度化と社会実装の最速化に全学で取り組んでいます。

二つの拠点の整備が進んでいて、宇宙理工学研究拠点では、宇宙物理学と材料科学が結びついています。二〇二三年に学生と教員が一丸となって開発した衛星「こう」が打ち上げられ、現在は金沢大学衛星二号機「IM PACT」の開発を進めています。

ライフサイエンス系研究拠点では、脳科学、考古分子生物学、老化科学などの研究者が一同に会し、新たな融合研究の種が生まれています。

人・設備・資金を連携させる

学長 この流れを社会実装につなげるために

支援やコアファシリティにも力を入れています。学内の共用分析装置などを学内はもちろん、学外も含めて利用できるようにし、研究ができます。

のスピードと質を高めています。この取り組みは国際「コアファシリティ構築支援プログラム」にも採択されています。

整備したのが、二〇二五年七月に本格稼働した「未来知実証センター」です。自由に交流・議論できる空間として設計され、インキュベーター・キャピタリストも関わり、スタートアップ創出の場として機能しています。

資金面では、二〇二四年一月に本学と北陸先端科学技術大学院大学が主幹機関として採択されたスタートアップ創出プラットフォーム（TeSH）にGAPファンド等を設けています。

さらに国立大学として初めて自己財源一〇

志を実現するタフな人材——「金沢大学ブランド人材」

—特色ある教育について、先ほどお話にあつた「金沢大学ブランド人材」を育成する取り組みについてうかがいます。

学長 「金沢大学憲章」に「学生の個性と学ぶ権利を尊重し、自学自習を基本とする」とあります。この理念のもと、「国際社会の中核的リーダーたる金沢大学ブランド人材」すなわち志を実現するタフな人材を育てるのが目標です。

その指針として、教育全体を俯瞰して見て

志を持ち、新しい取り組みを進め、実践するには、課題を自分で見つけ、チームをつくり、できない理由をさがさずに壁を越えていく力が必要です。これが私の言うタフさです。

志を実現するタフな人材を育てるには、課題を自分で見つけ、チームをつくり、できない理由をさがさずに壁を越えていく力が必要です。これが私の言うタフさです。

女子学生比率40%超 学士課程で実現！

学長 理工学域で女子枠特別入試を拡充したこと、全学で女子学生比率が四〇%を超えて注目されました。ダイバーシティを尊重するというメッセージが伝わったのだと思います。

さらに高等学校、大学、大学院から若手研究者への接続にも取り組んでいます。附属学

校園を含め、小中高大院を見通した一貫した発想で、学びと進路を接続します。小中高型のSTELLAプログラムも行い、初等中等教育からの接続を意識しています。

示しています。

志を持ち、新しい取り組みを進め、実践するには、課題を自分で見つけ、チームをつくり、できない理由をさがさずに壁を越えていく力が必要です。これが私の言うタフさです。

大学院でのリバーラルアーツ——尖った専門分野が出会う

—大学院教育の取り組みについてお話をいただけますか。

人間力を高めて限界を超えて挑戦するという姿勢ですね。

実際にタフな学生が多いと感じています。

二〇二三年のG7広島サミットに伴い本学で開かれた「教育大臣会合」のエクスカーションでは、各国の大蔵級の方々の前で学生、大學生、留学生が「教育の未来」について発言し、大学院生が教育の未来に関する「金沢大学ユース宣言」をまとめました。物怖じせず議論し、会合後も交流を続ける姿に、多くの方から「学生を誇りに思ってよい」と言つていただきました。私自身も誇りに思っています。学生にとつても大きな自信になつたは

特徴です。

併せて従来より重視しているのが「経過選択制（レイト・スペシャラライゼーション）」で、文系・理系一括入試では、入学後の一年間、幅広い分野について学んでから、学類や専攻を選ぶことができます。

国際が日常にある

—国際化の取り組みはいかがですか。

学長 一〇年間の「スーパーローバル大学創成支援事業」の取り組みによって、TOEIC七六〇点以上の学生数が大幅に増え、

〇%出資のベンチャーキャピタルも一〇一二年に設立しました。研究の種に資金をつけ、目利き人材も揃えることで、人・設備・資金を連携させています。この仕組みのもと、認定ベンチャーも八社立ち上がってます。自動運転の「株式会社ムービーズ」など、研究成果を社会に届ける動きが具体化しています。

私はよく、基礎研究の土壤を肥沃にし、そこから高い頂をつくるイメージを「富士山」に重ねて話します。ただ本学が目指すのは単峰ではなく連峰のような、「研究拠点群」です。J—PEAKSの「S」にも複数の山（連峰）の意味があるとうかがっています。基礎研究から段階的に事業化まで進んでいく仕組みを整えるとともに、そこに魂を入れることに注力していきます。

この流れをさらに拡大強化していくのが、二〇二五年九月に採択された「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業（FLAGs）」です。総合型の一つに本学が選ばれました。

この流れをさらに拡大強化していくのが、博士人材の支援としては、国による博士学生支援事業による採択を得て、博士研究人材支援・研究力強化戦略プロジェクト「Hakka Se +（ハカセプラス）」において、本学独自の支援を組み合わせながら、経済面、キャリア形成面をトータルで支える仕組みにしています。

キャンパス全体の英語力も底上げされました。二〇二四年に採択された「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」では三本柱を掲げています。第一に、国際が日常にある、日常が国際であるようなキャンパスづくり。そのために、留学生の増加に力を入れています。第二に「文化」を軸にした「多文化共修」。国際的な視野から日本を研究し、日本文化を教える「国際日本研究教育センター」を設け、日本人学生と留学生がともに学ぶ「多文化共修」を進めています。第三に「大学の世界展開力強化事業」も踏まえた国際ネットワークの強化です。海外リゾンオフィスは三〇カ所に拡大しました。さらに学生や教職員に「他流試合」として海外での研さんを勧めています。私自身も留学することとで見える風景が変わりました。

金沢は文化都市、学術都市として国際的にも知られ、学びの場としての魅力があります。そこに大学としての教育資源を重ね、相互にWin-Winのかたちをつくりたいと考えています。

自由な環境をつくる

——学生の「自学自習」の学びを支える環境づくりについてうかがいます。

学長 教員・職員・学生がチームを組む取り組みも進めています。学長就任時に設けた「改革戦略室」からプロジェクトのアイデアが次々に出てきています。例えば、コロナ禍で使われなくなつたス

を守ることを軸に、取り組みを進めています。これまで多くの学生・教職員が現地に入り、ボランティアや学術調査、医療支援など多様な活動を行っています。避難生活が長期化するほど心の問題は深刻になるため、医療関係者、公認心理師、学校の先生方とも連携し、心のケアにも注力しています。学生も非常に頑張っており、自主的な参加者は累計で二二〇〇名を超えていました。

これらの活動は定期的に広く報告する機会を設けています。例えば、二〇二五年九月に開催した「日経地方創生フォーラムin金沢」では、こうした支援の取り組みや現地の情報発信も行いました。

創造的復興へ

学長 センター発足から一年間の活動を踏まえて二〇二五年四月から、未来創造部門、ひとづくり部門、まち・なりわいづくり部門の三部門に改組しました。

未来創造部門が全体の窓口として地域のシーズ・ニーズの分析、教職員の能登での活動や他機関との連携を推進しています。

ひとづくり部門では、分野横断の学びで防災・復興に携わる人材を育てます。二〇二五年度入試から、KUGS特別入試「防災・復興人材選抜」を開始し、二〇名が入学しました。また、在学者向けの正課教育として「防災・復興人材特別プログラム」を開始し、一〇〇名を超える学生が参加しました。

このプログラムは学生の関心が高く、将来性を、学生が集まれる場所に変えました。フレードコートを整備し、交流スペースにしました。落書きも自由にし、私が真っ先に落書きました。こうした自由な環境が、学生の発想を促すと思っています。

ベースを、学生が集まれる場所に変えました。フレードコートを整備し、交流スペースにしました。落書きも自由にし、私が真っ先に落書きました。こうした自由な環境が、学生の発想を促すと思っています。

学長になつてから、学生と一緒にどうしてもりたかたことが二つあります。一つが共通教育科目「未来デザイン・ラクテイズ」です。「自分と未来は変えられる」をテーマに、自分の未来、社会の未来、大学の未来もやります。自分でデザインし、失敗してもいいから実践してみる。集中講義で提案を受け、単位として認定しています。良い提案とその実践には予算を付け表彰も行っています。

震災時には留学生向けの防災減災パンフレットを英語でつくった学生チームもいました。本学には留学生が約一二〇〇人おり、六〇数カ国から来ています。国旗をキャンパスに並べてウェルカムな雰囲気をつくるプロジェクトもあります。これらは学生が自分で

考えて自ら動いてくれました。

アイデアは雑談から生まれる

学長 もう一つが交流事業「雑談のチカラ」です。「偶然の出会いを必然に」をテーマに実施しています。コロナ禍を中高時代に経験した学生はコミュニケーションの機会が限定されていました。彼らにも、人ととの出会いを大切にして、雑談の楽しさをぜひ知つてほしいと思います。なげない雑談の中からふとひらめき、アイデアが生まれ、人と人がつながつていきます。これは研究でも同じではないでしょうか。

この取り組みでは各界で活躍されている有識者の方々に来学いただき、これまで五〇回ほど開催しました。学生と交流したいとおしゃつてくださる方が多く、今では開催までお待ちいただくこともあります。ただし就職活動の場にはしません。あくまで雑談です。

アカデミアとして「文化」の薫る地域を守る

——能登の創造的復興に向けた取り組みについてうかがいます。

学長 二〇二四年一月一日に令和六年能登半島地震が発生し、ただちに災害対策本部を立ち上げ、対応しました。一月三十日に「能登里山里海未来創造センター」を立ち上げました。これは復旧に加えて、中長期の創造的復興・再建に向け、アカデミアとして行動する

ためです。能登には従来から本学の教育・研究拠点が設置されており、地域の方とともにさまざまなか活動を進めています。能登には輪島塗や珠洲焼、奥能登の「あえのこと」、キリコ祭りなど、有形・無形の文化が息づいています。そこで活動のベクトルを合わせる中心理念として「文化」を掲げました。文化の薫る地域

的にはオープンバッジ化して、より多くの学生が学べる仕組みにしたいと考えています。まち・なりわいづくり部門では「生命(Lives)・生活(Life)・生業(Living)」の三つのLを軸に研究を進めています。珠洲市では災害時にも一定期間自立できる「オフグリッド住宅」やコミュニティを構築す

「金沢大学で学んでよかつた」と思つてもらいたい

——最後になりますが、学長として大切にしていることについてうかがいます。

学長 私は、人こそ宝、財産だとの信念を持っています。学生と教職員とともに前向きに進みたいと思っています。そのために対話を重視し、部局や研究所などを回って、大学の目指す方向を説明し続けています。学生ともよく話し、大学院生や留学生とも定期的に対話をしています。

突き詰めれば「金沢大学で学んでよかつた」と思つてもらえる大学であり続けたい、とうことに尽きます。

ワクワクが人を集めます

学長 私は学士課程の一年生全員に講義を

し、「金沢大学へようこそ」「私たちや金沢大

学生は、皆さんの洋々たる未来に向けて背中を押します」と伝えています。講義の後半は質問コーナーにしており、平均すると七、八件は質問が出ます。最初に手を挙げた学生には

る試みを行っています。能登のシンボルである見附島にちなんで「未来知MITSUKE(ミツケ)プロジェクト」として展開しています。将来的には「住みながら健康になれる家・コミニティ」を目指します。家にいるだけで健康モニタリングができる仕組みの導入も計画しています。

また、先日も若手研究者と二時間みつかり議論しました。節目ごとに現場と対話をし、「自分自身もワクワクしながら、学生や異分野の若手研究者と一緒に研究してほしい」と伝えていました。

研究でも、教育でも、ワクワクしながら取り組んでいるところ、心地よいところに人が集まると思います。大学としてできるだけ支え、研究者には自分の研究の面白さを外に届けてほしいと思っています。

研究が面白かった、学食が美味しかった、

先生の講義はジョークが面白かった——など、トータルとして「金沢大学に来てよかつた」と思つてもらえる大学であり続けたい。学生も教職員も、そして本学に関わつてくださるさまざまなステークホルダーの皆さんとともに、その思いで前に進んでいきます。■